

	<h1>みずみどり</h1>
2008年3月15日 第65号	
発行：いたばし水と緑の会 事務局	
年会費 2,000 円 郵便振替 00170-8-352508 いたばし水と緑の会 http://homepage3.nifty.com/mizutomidorinokai/	
E-mail : mizumidori@nifty.com	
〒174-0063 板橋区前野町 5-31-7 瀬田方 tel&fax3969-7124	

光が丘公園の 「ススキ原っぱ」を見学しました



1月15日号の会報に坂本さんのバッタ広場をどうしたらよいのか記事、わたしもどうしてよいのか、悩んでしまいます。水と緑の会が出来て10年、会のメンバーも10年歳をとり、先日NHKの番組で65歳以上の方が半分以上の村や町を限界集落と言うようですが、水と緑の会はどうかなと思ってしまいました。悩みつつも赤塚公園は皇居や目黒の自然教育園に匹敵する都会に残された貴重な自然と位置付ける人もいる大切な場所、何とか出来ないものかと考えています。光が丘公園に「ススキ原っぱ」があるので2月19日に4人で見学に行ってきました。

光が丘公園は米軍のグランドハイツの跡地で昭和48年返還され全体の3分の1が公園として残されました。資料によると公園の面積は607,823平方で野球場、テニスコート、サッカー場、サイクリング場などの施設と木が16300本、602,000株、又バードサンクチュアリーのような自然の施設もあって土曜日と日曜日に中に入れるようになっています。中は池とヨシなどの原っぱと林があって、覗き窓の望遠鏡からはこの日オオタカがちらりと見えました。オオタカが狩をした小鳥の残骸なども展示されていました。バードサンクチュアリーの管理は特定非営利法人の生態工房が仕事として管理を任されているそうです。そしてこの生態工房の方が

「ススキ原っぱ」をボランティアで管理しているようです。ススキ原っぱは簡単な杭とロープで囲ってある、1070平方の枯れたオギとススキの原っぱでした。

主な活動は、管理作業、調査、学習で、やはり管理作業が主なように思いました。管理作業は、ススキやオギの刈り取り、運び出し、ススキも密集すると中から腐るようです。ササ刈りも何回かやっているようです。ササは強くて厄介ですから大変だと思います（バッタ広場でも苦労しています）。外来種は抜き取る、実生の木は抜いてしまう。バッタ広場はたくさんのエノキが生えてゴマダラチョウが来たらいいな—とっていたらどんどん大きくなって慌てて切ったりしましたから。後は落ち葉はきと柵の修理と書いてありました。原っぱに来た昆虫の調査もやっているようでした。

赤塚のバッタ広場はススキ原っぱと違い、森と草はらの中間の半端な状態で管理していて、この状態は生き物の多様性という面から見れば、チョウやガ、バッタがたくさんいてとても面白いものですが、しかしちょっと油断すると、植物の成長のエネルギーに圧倒されて、アズマネザサ、クズに覆われてしまいます。

今回見学をして思ったことは、年間計画を立てて作業をしている事と、作業のときに協力してくれる人を募集している事でした。

光が丘公園全体を見学してみて他には、伐採した枝を重ねて立ち入り禁止のバリケードを作っており自然の物を上手に使っていて暖かい感じがするし、ごみも出ないし良い方法だと思いました。このバリケードは小鳥の水飲場の仕切りにも使われていました。光が丘公園には驚くほどたくさんの種類の鳥たちが訪れているようで、案内の写真にはツグミ、モズ、エナガ、ミソサザイ、オオルリ、ルリビタキ、アカハラ、シロハラなどなどたくさんの鳥たちが訪れているようでした。写真をざっと数えただけでも40種類以上、この鳥たちを追っかける鳥好きの人たちもカメラと



低木や下草が茂ったこんもりした森の一角が開けたところに小さな水飲み場（写真左奥）があり、野鳥がたくさん集まるスポットになっている。カメラを持った人が野鳥の来るのを辛抱強く待っていた。この正面だけがオープンになっていて、他から内部に入れないよう伐採した枝でバリケードが出来ている（右）。

スコープ持参でにぎやかでしたが。公園には屋敷林を保存している場所もあって、古い農家の庭をビオトープとして保存しているものですが、屋敷林の中は、とても静かでシジュウカラ、エナガなどが群れていました。ここの管理もボランティアによるものでした。

光が丘の自然保全の方たちと直接話したわけではありませんが、ススキ原っぱ、屋敷林、バードサンクチュアリー、とても面白いと思いましたが、多分同じような苦労も想像してしまう見学会でした。

瀬田政江

「いたばし水と緑の会」とトンボ池と梅まつり

3月1日、2日に、赤塚ため池公園で赤塚梅まつりが開催された。今年は梅もちょうど見頃で、琴の演奏、俳句、野点などのイベントや甘酒のサービスなどがあり、たくさんの人で賑わった。この梅まつりにいたばし水と緑の会が参加して今年で10回目になる。きっかけは釣りで賑わう大きな赤塚ため池公園の中にある土の小さな自然池（赤塚トンボ池）である。

赤塚トンボ池は、トンボのような小さな生き物がやって来て、卵を生み、育ていける水辺をつくろうと、1998年に板橋区が呼びかけ、住民参加の検討会を重ねて、池のプランをつくり、土（粘土）を張るなどの手作業も住民が泥だらけになってつくった池だ。

1997年結成、赤塚公園をフィールドに活動を開始して間もない「いたばし水と緑の会」は、トンボ池づくりの検討会に加わり、どんな池にしようかと話し合い、自分たちでつくったプランによる池づくり作業に参加した。完成後は実質上会が維持管理を行い、トンボ池は会が取り組む活動の一つとなった。

なぜホタルの池でなくありふれたトンボ池なのか。私たちは、生き物をよそからもってきて飼育するのではなく、生き物が住める環境を整えることが自然を取り戻すことだと考えた。

自然をまねた土と草のある水辺には、ホタルは自力で飛来できないが、トンボなら飛んできて卵を生み、幼虫が育ち、羽化してトンボになって飛び立っていけよう、カエルも卵を産んで、オタマジャクシがカエルになって上陸するだろう、そんな生き物にとっての生息空間になる水辺を整えることが目的だった。

最初に赤塚梅まつりに参加したのは1999年。「コンクリート池を壊して自然の池をつくります」と梅まつりの会場でお知らせし、池づくりボランティアを募集した。トンボ池が完成した翌年から、池の傍らで生きものたちの自然池のPRをした。

梅まつりのころヒキガエルは冬眠から起きて池に来て卵を産む。私達は梅まつり来場者にトンボ池に来たヒキガエルや卵を見てもらい、パネルで赤塚の自然を紹介し、生き物も住める環境を大事にしてほしいと訴えてきた。自然の紹介だけでなく子ども達も楽しめるものにと始めたのが

ノコギリ体験コーナー。ノコギリを引いて竹の一輪挿し（鉛筆立て）や、輪切りにした木の枝でペンダントをつくる工作だが、人気があって私達は休む間もないくらい。



「ノコギリ体験」(写真左上) まず自力?で枝を輪切りにする。(写真右) 子ども達は思い思いの絵を描き、私達が金具をねじ込んで好みの色のリボンを通してペンダントのできあがり。(写真左下) 大人もノコギリ体験



子ども達は会員に手を添えてもらってノコギリをギーコギーコ引きながら竹や枝を切る。輪切りにした直径5cmくらいの板や竹にマジックで絵を描いているのを待ちながら、家族の人たちはのんびりと池をのぞき、パネルや標本を見たり、この辺の昔話をしたり、私達の話

を聞いたりして時間をつぶす。トンボ池は枯れ草がぼうぼうで水も濁っている。それでも「汚い池」と言う声は聞かれない。「昔のため池もこんな感じだったよ」「今年寒いからカエルはまだ出てこないね」等々。「少しずつでも自然を取り戻さなくてはいけないね」という声に認知されてきたことを感じ、励まされる。



自然を取り戻す活動は順調に来ているわけではない。池が完成するやいなや、次々と不要になった?生き物が入れられて呆然。いっ

パネル、板橋区では絶滅した昆虫と赤塚の森の掃除屋さんの役割を果たす昆虫の標本、赤塚公園で見つかったモグラの剥製

たん入れられた生き物は容易に取り除けない。悩みの種は、もともとため池や湧水水路にもいたザリガニの新領土になってしまったことだ。コンクリの池の時にはザリガニはいたが、年に何回か水を抜いて、デッキブラシでゴシゴシ洗えばリセットできた。が、土の池ではリセットできない。いろいろやってみたがうまくいかず、最終的に小さな生きものが隠れられるヨシの茂みをつくった。トンボは次々と来て産卵しているがヤゴの抜け殻はまだ見あたらない。

池も10年近く経ち、看板は破れ、柵や橋の傷みもひどくなり、補修の程度もボランティアの手に負えなくなり、環境保全課に対策をお願いした。役所では予算を組んで修理して存続させるか、生き物たちの自然池を廃止するか検討するそうだ。

どういう運命が待ちかまえているのか。5月には泥の中の調査をするため胴長も注文した。ヤゴにこだわるわけではないが、「トンボ池」なのだから、ここでヤゴには生きていてほしい。

観察・管理記録(2007年11月～3月)

- 11月11日(日) 10:00～12:00 晴 浄蓮寺トンボ池調査
- 11月17日(土) 10:00～12:00 晴 赤塚城址周辺のごみ拾い
- 11月24日(土) 10:00～12:00 バッタ広場維持管理作業(ゴマダラチョウの幼虫、アカボシゴマダラの幼虫有り。ふわふわのガガイモの種。アズマネザサがほぼ全域に拡大、クズの地下茎、地上茎(蔓)が縦横無尽に張り巡らされていた)
- 12月22日(土) 10:00～12:00 バッタ広場管理作業(クズ、笹刈)
- 2月9日(土) 10:00～12:00 梅まつり準備
- 2月16日(土) 10:00～12:00 赤塚城址観察会 クロテンフユシャク、ウスバフユシャクがトンボ池に数匹落ちていた。生きているものもいて、掬い上げて助けた。公園灯が蛾を誘引し、隣の池がトラップになってしまっている。シロフユエダシャク。蛾が都会だけでなく地方でも少なくなっている。土に潜ってサナギになるが、潜り込めるような軟らかい土が減っていることも原因の一つではないかと、釣巻さんが言う。
- 2月17日(日) 10:00～12:00 光が丘公園で観察。
- 2月23日(土) 10:00～12:00 バッタ広場管理作業(クズ、笹刈)

観察ノートから

- 1月11日(金) 晴 やはりカワセミはこのあたりで寒くとも冬越しするならん。数日前の朝には郷土資料館前の池の杭にいた。今またトンボ池の小橋の上に。シメモチェツェツと二声ずつ鳴いて飛んできた。ウグイスはジャッジャツとサザンカの下に来た。ツグミがキキッと鳴いて上空を。梅も小さなつぼみとはまだ言えないアズキくらいの花芽が。今日は池に氷も張っていない。
- 3月13日(木) トンボ池からコウコウコウとやさしい鳴き声がある。アシの倒れた水面や橋の方やらあちこちに黒みがかった大きなカエルだ。暖かい日が続いたから、まもなくカエル合戦がみられるかな。

3月15日(土) この日の最高気温は20、前日は雨のカエル日和で池に現れたカエルは20匹以上か。写真はウシガエルに抱きついたままのヒキガエルの雄



赤塚城址の森1万年の歴史(2)

弥生時代の始まりの頃

前回とばしてしまった、報告書(1992年)のAJ-1c 亜帯について少し書いてみる。この亜帯には年代が推定できる火山灰層が含まれている。火山灰は広い範囲に降り積もり、火山毎に成分が違い、しかも同じ火山でも噴出年代が違えば、その成分は変化する。歴史時代に入ってから噴火ならば、例えば富士山腹から噴出した宝永火山の火山灰ならば1707年と年代が特定できる。

AJ-1c 亜帯に含まれる火山灰は、湯船第2スコリア(スコリアは火山ガラスの1種)と呼ばれる約2200年前(年代は報告書のままで、1950年を基準にしている)のものである。この頃の林層は前のAJ-1b 亜帯とは大きな違いはないが、1c 亜帯の初期に増加したクマシデ属—アサダ属の花粉がこの火山灰層を境に半減する。現在この地に自生しているクマシデ属—アサダ属は、イヌシデ(多い)とアカシデ(少ない)であるが、現在の東京付近では山地性の樹木であるアサダの種子が、この時代の地層から見ついている。北区中里遺跡でもアサダの種子はかなり出ているので、当時は平野部にも普通に見られる樹木であったと推定される。

縄文晩期から続く寒冷な気候は弥生時代前期の前半まで続いていたようだ。弥生時代の始まりを3000年前ごろとする説が最近出されており、湯船第2スコリアの年代も見直されるのかもしれない。松木(2007)では弥生の始まりを2800年前とし、2600年前ごろから気候は温暖になり、弥生の盛期を迎えたとしている。クマシデ属—アサダ属花粉半減は冷温帯に多いアサダの衰退によるものとすれば、なんとなく辻褄は合いそうだがあてにはならない。前回の冒頭に書いたように、ボーリング地点が数十m離れていれば、別の結果がでる可能性は否定できないのだから。赤塚の地で気候の温暖化は、前回に書いたAJ- 帯になってからのほうが明らかなようだ。トチノキの急減、常緑カシとスギの緩やかな増加である。ニレ属—ケヤキ属が半減しているのも目立つ。中里遺跡ではケヤキと共にニレ類の材が少数出土している。冷温帯に多いハルニレと推測しているであろう。ハルニレも現在では関東地方平野部には見当たらないようである。ケヤキと常緑カシ類、スギの生息適地が重なることも影響しているのかもしれない。

人口が希薄な地域であった縄文晩期から弥生時代前期の荒川下流域で、再び遺跡数が増えてくるのはこの温暖期以降のようだが、人間の活動により森林が影響を受けた形跡ははっきりしない。前の時代に比べ草本植物の花粉が増えているが、これは低地部が水深のある湿地になったことによるのか、人為が関わっているのかは不明である。

古墳寒冷期以後

手元に本が無くややあいまいだが、古墳寒冷期は安田喜憲氏が命名したものである。AJ- 帯がこの時期にあたると思われるが、報告書ではAJ- 帯の下限が弥生時代か古墳時代初頭であるとしている。西暦250年ごろから縄文晩期に匹敵するか、それ以上の寒冷な気候がしばらく続いたようである。

AJ- 帯とAJ- 帯の間の地層にはギャップがあるそうだが、林層もかなり急激に移り変わっている。ギャップにより変化が際立っているのは確かであろうが、人間の活動による影響は間違いないであろう。草本植物の花粉の割合が徐々に増えていくことと、ハンノキ属花粉の急減である。この地域のハンノキ属はヤマハンノキとハンノキの2種である。ヤマハンノキは現在でも武蔵野台地の雑木林にかなり見られるが、現在の赤塚公園一帯には見つからない。湿地性のハンノキも現在、板橋区内には非常に少ないが、つい最近までは普通種であったことの名残が、白子川や日蓮根川流域に残っていた。

急減したハンノキ属はハンノキであったと思われる。板橋区では弥生時代中期後半から始まったと見られる水田耕作が本格化して、湿地のハンノキ林が刈り倒された結果であろう。水生植物の花粉や珪藻化石から見て、水深がある湿地という状況に変化がないことは確かなようである。

AJ- 帯の時代は江戸時代の直前までを含む長い期間である。この時代、常緑カシ類はすこしずつ減少する一方、落葉ナラ類は増えている。気温の低下も原因の一つであろうが、人為の介入の方が大きな原因になったとも推測される。トチノキなどの冷温帯樹種の勢力が回復しなかったのも人為の影響かもしれない。AJ- 帯の始まりは寒冷期だが、平安時代は温暖な時期となり、室町時代ごろから再び寒冷化していく。しかし森林はスギ、ヒノキが増えていく以外に変わりはないようである。気候の影響よりも人間の影響の方が大きくなったことによるのであろう。

江戸時代

AJ- 帯の時代、江戸時代になると赤塚の森林は大きく変わり始める。常緑カシ類が大きく減少し、落葉ナラ類も減り始める。トチノキは全く見られなくなり、今まで細々と生き残ってきたブナ、イヌブナもAJ- の初期を最後に姿を消す。カバノキ属、トネリコ属もこの時代以降には見つからない。

前の時代からスギは一貫して増え続けるが、この時代を特徴づけるのはクロマツ、アカマツが属する二葉マツ類の急増である。板橋区周辺ではアカマツが主であろうが、これが植林によるものであることは確かなようである。AJ-I 帯からAJ- 帯までマツ類花粉は極少量だが見つまっている。AJ- 帯になるとマツ類が一挙に赤塚の森林の主構成樹種になる。

近畿地方では7世紀ごろ、マツ類が非常に増えたことが、当時の陶磁器窯跡の燃料分析などにより確かめられている。花崗岩地帯が多く土壌が薄かった西日本では、森林資源の過剰利用により、貧栄養地でも育つマツ類だけが、人の意図に関わらず増えていった。関東地方のマツ類増加は明らかに人の意思によるものである。土地が痩せたのでマツが増えたのではない。土木建築用材としてあるいは燃料用としてマツ類は重要であった。江戸城の基礎にもマツ材が使われているようだ。製塩の燃料として松葉は重要であったそう。江戸時代の製塩地、神奈川県金沢付近のマツ林このために造られたそう。

次号にはスギと植林業、江戸時代の常緑カシ類について書く予定である。 (釣巻岳人)

活動のお知らせ

運営委員会は毎月第1金曜日です。どなたでも参加できます。

4月運営委員会： 4月 4日(金) 18:30~20:30

5月運営委員会： 5月 2日(金) 18:30~20:30

場所：エコポリスセンター環境学習室

会報の印刷・発送は奇数月。お手伝いできる方はよろしく

日時：5月15日(木) 18:00~ 場所：エコポリスセンター

変更する場合もあるので、事務局にお問い合わせ下さい。

活動の問い合わせは瀬田まで(3969-7124)

会では赤塚城址周辺で、私たちが作ったビオトープを中心に自然の変化を観察したり、ゴミ拾いや、ビオトープの改善作業等を行っています。観察会は原則として雨天も実施します。

4月赤塚城址周辺クリーンアップ

日時：4月19日(土) 10:00~12:00

集合場所：赤塚トンボ池(区立美術館そば)

2008年総会

日時：4月19日(土) 13:00~15:00

集合場所：赤塚5丁目集会所(東京大仏前の信号のひとつ美術館よりの道)

生き物のすめる環境整備と調査

日時：3月22日(土) 10:00~12:00(ミニトンボ池生物調査)

4月26日(土) 10:00~12:00(バッタ広場クズ・笹刈)

5月17日(土) 10:00~12:00(赤塚トンボ池生物調査)

集合場所：いずれも赤塚トンボ池前(板橋美術館そば)

荒川の観察会に参加しませんか

荒川の観察会グループの観察会(下見)に仲間入りさせていただきます。

日時：4月12日(土) 10:00~12:00

集合場所：板橋区立リサイクルプラザロビー

四季のおくりもの 篠原智男先生の植物画展

日時：3月18日(火)~23日(日) 9:00~16:30

会場：赤塚植物園 講習室

あなたも会員になってください(年会費2000円：振込先は表紙に記載)

いたばし水と緑の会の活動はすべて会員の会費によってまかなわれています。主な用途は、会報郵送料、印刷費、ビオトープ池維持管理のための資材費、コピー代などです。